



賛助会員・機関誌購読者のみなさま、および
「3.11 からの出発」活動基金にご寄付くださったみなさまへ

「3.11 からの出発」活動のご報告 No.3

松岡 享子

大震災から7ヵ月が経ちました。ご報告 no.2 をお送りしたあと、わたしたちの活動に大きな進展があったことをお知らせできるのをうれしく思います。今回は、6つの項目について、以下にご報告いたします。

1. 陸前高田市に、子ども図書館ができます！

盛岡にあるNPO法人うれし野こども図書室が、震災直後から、陸前高田に子ども図書館を設置したいと努力を重ねてこられたこと、東京子ども図書館がこの事業を全面的に支援すると決めたことは、かねてお知らせしたところです。その計画が、幸いにもジャパンプラットフォームの「共に生きる」ファンドと、公益財団法人東日本大震災復興支援財団の助成を受けることができ、いよいよ実現の運びとなりました。

場所は、市内の竹駒地区。コミュニティセンターに隣接する場所で、大きな道路から少し入った、森に抱かれた落ち着いた環境です。市から土地の使用を認められ、ここに、うれし野こども図書室側で、トレーラーハウスを設置、運営することになりました。トレーラーハウスに決めたのは、将来移動しなければならない場合を考えてのことです。トレーラーハウスは、長野市に本社のあるカンバーランドジャパン社製で、大きさは3.2×10メートル。内部は約20畳くらいでしょうか。書架その他の家具は、長野のおはなしグループ「おはなし畑」のメンバーの献身的な協力を得て、メンバーの青山繁さん（現在お話の講習会28期を受講中）が鋭意製作中。10月末には、トレーラーハウス本体もできあがり、11月上旬に現地に運ばれる予定です。

この図書室の正式名称は、「NPO法人うれし野こども図書室分館・陸前高田こども図書館・ちいさいおうち」と決まりました。肝心のここで働く専任の図書館員についても、願ってもない適任者が見つかりました。臨時職員としてではありますが、地元大船渡、一関などで約8年の図書館勤務の経験をもち、うれし野こども図書室のメンバーでもあり、大船渡と陸前高田のおはなしグループにも参加して活動をつづけてきた、大船渡市在住の吉田佳織さんです。常々図書館のサービスの質は職員によって決まると信じているわたしたちは、吉田さんに、安心して力いっぱい働いてもらうことが、東京子ども図書館としての「ちいさいおうち」に対するいちばんの支援になると考え、吉田さんを東京子ども図書館の職員として採用し、「ちいさいおうち」の専任図書館員として働いてもらうことにいたしました。吉田さんは、10月に、館で研修を受け、現在、「ちいさいおうち」の蔵書の受け入れ等、準備をすすめています。以下は、仕事を始めるに当たっての吉田さんのことばです。

「このたび、思いがけず、このような素晴らしい図書館で働かせていただけることになり、ほんとうに夢のようです。東京子ども図書館を通してご支援くださっている全国の皆さまに、心から感謝申し上げます。

私も被災し、自宅も、両親の店も全壊し、しばらくの間、避難所で生活しておりました。そのなかで、ともに生活する子どもたちと一緒に絵本を読んだり、わ



「ちいさいおうち」蔵書印



らべうたで遊んだりして、子どもたちの笑顔を見るのがなにより幸せな時間でした。失ったものは大きいですが、『陸前高田こども図書館・ちいさいおうち』は、この地の大きな希望だと思います。子どもたちの見る未来が、少しでも明るいものとなるよう、一人ひとりの心によりそって、丁寧に物語を手渡していきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。」

順調にすすめば、11月25日に開館が予定されております。吉田さんのことばにありますように、ここがこの地の希望となり、子どもたちの笑顔と笑い声で満たされるように、どうぞ、みなさま、この新しい図書館のことを心にとめて、ひきつづきご支援くださるようお願いいたします。

2. 小友小学校の子どもたちに、本を贈りました。

7月20日、再び小友小学校を訪れることができました。最初に行ったときから1ヵ月が経って、震災後、校舎の前に子どもたちが植えた花が勢いよく咲きそろっていたのが印象的でした。この訪問には、戦時中陸前高田に疎開していた加納純子さんが同行され、高学年の子どもたちにお話を届けました。以下は、加納さんの記録です。

「学校に着いて、まず目に入ったのは、校舎に面して咲く色とりどりの花。それと対照的に、校庭の先には撤去されないままの瓦礫の山があります。子どもたちにとって忘れてたくても忘れられない現実がそこにありました。しかし、前回「番ねずみのヤカちゃん」を語られた松岡先生を見つけた子どもたちの顔は弾け、歓声があがりました。この子等の元気な笑顔が大人を元気づけるのだと思いました。

さて、私は高学年を担当することになりました。音楽室に入ると、40数名の子どもたちが待っていてくれました。まず、私が子どもだった頃のことから話しはじめました。空襲を逃れて高田に疎開してきたこと。生活は厳しく、言葉の違い、井戸のある家からのもらい水、妹を背負っての子守など、話が暗くならないように、子どもたちと対話しながら語りすすめていきました。度重なる停電。ろうそくを囲んでの夜は所在なく、母はわたしたち姉妹にお話をしてくれ、みんなで歌をうたったことも。「どんな歌をうたったと思いますか？ 昔話が歌になっていたのよ」と、桃太郎、一寸法師などの歌を披露し、「ウサギとカメの歌もありましたよ。今日はその後日談『カメに負けたウサギ』*を聞いてください」と、お話にはいりました。次に「魔法をならいたかった男の子」**で子どもたちを魔法の世界に誘い、おまけに「コッケモーモー」***でしめくくりました。

終戦の年、3年生だった私は、聞き手の子どもたちと同じ年頃の4年間を、この地で過ごしました。父は戦死、父方の祖父母は焼夷弾で亡くなっていました。戦局の厳しい中、母方の祖父母は、7歳の私を頭に4人の子持ちだった母を案じて、私たちを故郷に疎開させることにしました。祖母は、泊りがけで引越しの手伝いに来てくれました。荷を送り出し、すっかり手はずを整え、安心して帰宅した祖母は、その夜、祖父と共に東京大空襲で命を落としました。自分を庇護してくれる夫、実父母、義父母の5人を数ヵ月のうちに亡くした母は、4人の子どもを引き連れて、陸前高田に疎開してきたのです。そんな状況下で、母は子どもたちが暗い、卑屈な子にならないように気を遣っていたのでしょう。毎日のように私たちにお話をしてくれ、歌をうたってくれたのです。

この事実は、そのまま子どもたちに語るには重すぎます。でも、陸前高田にいた子どもの頃のことを語るには、そこを避けては通れません。お話会のたのしい雰囲気を保ちつつ真実を語るにはどうしたらよいか、考え考え、ときには子どもたちに問いかけ、またときには当時うたった歌をうたいながら、子どもたちとの時間を過ごしました。

子どもたちにとって、第二次世界大戦は遠い昔のこと。しかし、そこを通り抜けてきた人が、今、自分



たちに語りかけているということで、何かを感じとってもらいたいと思いました。数カ月前、惨事にあった子どもたちは、私の話をどんな思いで聞いてくれたでしょう。あいにく逆光だったため、子どもたちの表情はよく見えませんでした。しっかり聞いていてくれることは感じられました。物資の乏しい時代、母の明るい歌声、物語る声が、私の心を潤したように、嵐が吹きまくっているだろうこの子どもたちの心を、少しでもお話で満たすことができたなら、と思いました。」

*『新百選日本むかしばなし』新潮社 **『白いオオカミ』岩波少年文庫 *** 同名絵本 徳間書店

小友小学校の子どもたちには、最初の訪問のときに届けた100冊余りの本の中から、欲しい本を選んでもらっていました。そして、2度目の訪問のあと、夏休みにはいる直前に、一人ひとり、その子の名前入りで、希望した本を届けることができました。図書室担当の千田裕子先生からは、後日お手紙があり、「終業式の日。本を一人ひとりに渡しました。自分が好きな本をいただけるだけでも嬉しいことなのに、さらに自分の名前がはいっていることに気づくと、どの学級からも歓声が聞かれました。そのときの嬉しそうな笑顔、先生にもお見せしたかったです」と、ありました。

小友小学校には、これからも、できるだけ定期的にお訪ねするつもりです。学校側とよく相談して、日常の教育活動に溶け込む形で、お話や本の紹介を行い、あわせて図書室の整備にも協力したいと思っています。第1回目の訪問のあと、何人かの子どもたちからお手紙をもらいましたが、ある2年生が「また学校にきて、またよんでください。ほかの学校にいつてみんなに、せかいにこんな本があるんだ、この本おもしろいなおもわせてください」と書いてくれたのには、ほんわり胸があたたかくなりました。子どもたちに本を贈ることも、活動基金の許す限り、夏休み、冬休み、進学・卒業時の年3回、今後もつづけたいと思っています。

3. 大船渡で読書ボランティア養成講座を行いました。

最初の訪問時にボランティアグループ「おはなしころりん」から要請のあった、仲間を増やすための講座を、「おはなしころりん」の主催で、10月11日、および15日の2日間にわたって、大船渡市民交流館カメラホールで実施しました。11日の第1回には、参加者50名余りを前に、松岡が活動へのおさそいということで、子どもと本をつなぐ仕事のたのしさを、意味について講演しました。聞いてくださった人たちの中から、22名の方が、ころりんの活動に興味をもち、2回目の会に出席を申し込んでくれました。

2回目は、ころりんのメンバーの人たちがリーダー役を務めて、具体的な活動内容等の紹介をすることになっていましたが、とてもよい会になり、将来へ望みがつなげるスタートになったようです。その後の展開を見守り、できるかぎり援助したいと思います。

翌11日は、松岡が大船渡北小学校で、1・2年生にお話し、ころりんのメンバーや、地元のボランティアの人たちに見学してもらいました。小友小学校同様、子どもたちは、ここでも元気で、よく笑ってくれました。とくに、おまけの「ライオン狩り」(『おはなしのろうそく17』)が気に入ったようでした！ 校長先生のおっしゃるには、「運動場が仮設住宅になり、なにかと不自由しているのに、子どもたちは決して不平をいわないのですよ。感心します」とのことでした。

4. 「3.11からの出発」お話会に、歴代の年度代表おばあさんが大集合しました。

9月19日の敬老の日、午前1回、午後2回の3部にわたって、「3.11からの出発」お話会を行いました。語り手の20名は、歴代の「おばあさんのいす」年度代表おばあさんたちです。直前になって体



調不良のため欠席なされた1名を除き、全員が集まるという快挙でした。また、それぞれの方が長年の経験とお人柄がおのずとにじみ出た味わい深い語りを聞かせてくださったので、延べ165名の参加者はすっかり魅了され、だれもが満ち足りた思いで帰途につきました。必要経費を差し引いた収益437,460円は、そのまま活動基金にくりいれられました。大勢の方から、「とてもたのしかった」「また、ぜひ企画してください」という声が寄せられています。

5. 「3.11からの出発 ブックリスト」第1号ができました。

震災で蔵書を失った図書館の児童室、学校図書館、子ども文庫などが、活動を再開するために、新しく本を購入するときの手がかりに、また、被災地の子どもたちに本を贈ろうとする人たちの本選びの参考にと、児童室の担当者を中心に作成していたブックリストの第1号ができあがりました。とりあえず1000冊の蔵書をつくりあげることが目標に、1号から10号まで、100冊ずつ順次発表する予定です。それぞれ絵本・フィクション60～70冊、ノンフィクション30～40冊を目安に選び、適宜大人の本、辞典、参考書なども加えて、小規模でも、ジャンル、対象年齢、季節、難易度などの観点からバランスのとれたものになるよう努めています。とりあげる本は、現時点で購入可能なものに限っており、全点解題つき。被災地の方には無料でお送りします。それ以外の方でご希望の方は、お問い合わせください。

6. 出版社から本の寄贈を受けました。

『子どもに語る日本の昔話』の著者筒井悦子さんから、版元のこぐま社を通して、自分が被災地に語りに行くことは無理かもしれないが、せめて本を届けることはできないかとのお問い合わせがあり、それを知った「子どもに語る」シリーズの他の本の著者のみなさまも同調され、同シリーズ全巻を各10冊ずつのご寄贈を受けました。さっそく、テキストになる本をすべて失った、地域の語り手たちの求めに応じてお送りし、たいへん喜ばれています。いずれ他の著者、出版社からもご協力いただけることを期待しています。

以上、これだけの活動ができたのも、すべてみなさま方からのご寄付があったからこそです。みなさまからのご寄付は、10月10日現在、10,532,467円になっております。ほんとうにありがたく、心よりお礼申し上げます。ただ、最初に申し上げましたように、わたしどもとしては、少なくとも5年から10年と、長く活動をつづけたいと思っております。そのためには、まだまだご支援をお願いしなければなりません。

今年のバザーのためには、児童室の子どもたちが、売り上げを被災地の子どもたちへ寄付するために、手作りに励んでいます。同じくバザーのために、松岡の絵によるねこの手ぬぐいも製作中です。この売り上げは、全額「3.11からの出発」活動基金にあてられます。こちらにも、みなさまのご協力をお願いいたします。購入ご希望の方は、11月23日のバザーにおいでくださるか、それ以降に館までお問い合わせください。

なお、前にもお知らせいたしましたが、月例お話の会のある日、午後4時から報告会と手仕事会をいたしますので、関心のある方は、どうぞお出かけください。 (2011年10月18日 松岡享子記)

公益財団法人 東京子ども図書館

〒165-0023 東京都中野区江原町1-19-10 Tel.03-3565-7711 Fax.03-3565-7712 URL <http://www.tcl.or.jp>

振込先 郵便局 口座記号番号 00130-9-115393

加入者名 公益財団法人 東京子ども図書館